

京都大学	博士（人間・環境学）	氏名	花輪 由樹
論文題目	郷土の教育に関する研究—学校教育と「遊びの都市」を巡って—		
(論文内容の要旨)			
<p>本博士学位申請論文は、教育における「郷土」という概念に着目し、これが学校教育と「遊びの都市」の中にどのように見られるかを探ったものである。郷土は『広辞苑』には「①生まれ育った土地、ふるさと、故郷」と記されているが、エドゥアルト・シュプランガーの郷土観によれば、誕生地が必ずしも郷土となるのではなく、その場所に慣れ親しむ体験が郷土獲得の要となると言われている。本研究ではこのような郷土概念をもとに、移動を前提とする現代の非定住型の生活における郷土獲得のあり方を考察している。</p> <p>本論文は3章から成っている。まず第1章では、幼稚園から高等学校までの全教科にわたって、昭和30年代から平成20年にかけての学習指導要領の用語調査を行っている。「郷土」「地域」の用語を、教科別・年代別・発達段階別に量的調査を行い、特に昭和40年代の「郷土」に注目して質的分析を行っている。既往研究の中では昭和40年代が郷土学習から地域学習に切り替わった時期とされていたが、本論文の量的分析ではこのような時期においても残り続けた「郷土」があることを見出している。また質的分析によれば、残存した「郷土」と共に用いられる「民謡」「音楽」「美術品」「料理」「工芸」といった語は芸術や歴史に関連するもので、そこには先人達の感覚が内在しており、「これが郷土である」と示された性質があることを明らかにしている。本論文ではこれを、継承することが期待される「名づけられた郷土」と命名し、一方、いまだ「名づけ」が行われていないものを、その人自身が決定できる「名づける郷土」と定義付けている。</p> <p>第2章では、上記の「名づける郷土」「名づけられた郷土」を巡って、これらを共存させる教育のあり方を探るため、郷土概念を教育学的に位置づけたシュプランガーの理論を再解釈している。まず郷土観については、以下の3点を読み取っている。①誕生地説を否定していること。②自分にとって意味深くなる「紐帯」が個々で異なるために郷土が多彩となりうること。③主観的な価値に事実性を関連させることで自覚された郷土愛を構築できることである。また教育観については、次の4点を抽出している。①子どもがもつ「固有世界」を徐々に拡大していくこと。②「固有世界」を大事にしながらも、家庭の外にある学校の世界へ「橋渡し」という教師の役割があること。③子ども達の固有の価値が常に保持されなければならない、それは物事に意味を与える遊びの世界に繋がること。④「主観」と「むき出しの客観」の間には、一部は心に一部は外界に属する「中間地帯」があり、これは「固有世界」と重なることである。</p> <p>これらのシュプランガーの郷土教育観を「名づける郷土」「名づけられた郷土」という視点より考察した結果、「名づける郷土」はその人にとって価値ある「紐帯」に関係し、「名づけられた郷土」は獲得が期待されている事実や知識にあたることを読み取っ</p>			

ている。そして「名づける郷土」は、「名づけられた郷土」を獲得する場合と、まだ「名づけられていない郷土」を獲得する場合とがあり、後者は、大人にとって重要ではないものに子どもが価値を見いだした場合に生じることで、それをどのように評価していくかということが課題として指摘されている。

第3章では、「遊びの都市」における郷土獲得のあり方を探るため、郷土獲得の構造、郷土と遊びの関わりについて確認した上で、日本とドイツの「遊びの都市」を調査し、「名づける郷土」と「名づけられた郷土」の視点から考察を行っている。

成田龍一によれば、生誕地を離れて都市へと移動することで、生まれた場所が故郷となる。奥野健男によれば、生まれ育った場所が都会でも原っぱやすみっこといった場所に故郷を獲得できる。前田愛によれば、森鷗外の『舞姫』を通して留学先のベルリンという都市でも周縁部に親しみを抱く場所がある。この内の奥野・前田を援用すれば、そういった余白や周縁、ウラという場所に、シュプランガーのいう、環境への親密性によって獲得される郷土があり、ここに都市における郷土獲得の可能性があると明らかにしている。

ジャック・アンリオによれば、遊びには「自覚」が重要であるとされ、それは遊んでいる自分と現実の自分との2領域の存在によって成立するとされている。本論文では、こういった別次元の2領域からなる「自覚される場」の構造が「郷土の自覚＝獲得」とも重なることを指摘し、遊びという状況が都市という均質的空間の中に、「親しみ」や「慣れ」という非均質性の発見をもたらし、郷土獲得に繋がることを解明している。

以上を踏まえて「遊びの都市」の活動に目を向け、日本とドイツではその開催期間の違い（日本は数日間、ドイツは数週間）、準備段階の違い（日本の多くが子どもに準備させる「子ども型」、ドイツのMini-Münchenは大人が準備する「大人型」）があり、それが「遊びの都市」の展開に影響を及ぼしていることを主催者等へのインタビュー調査や実態調査より分析している。そして「子ども型」は未完成な状態からスタートするため子ども達自身で不足点を補おうとする余地が残されているのに対し、「大人型」はテーマパーク的に創りこまれるため遊びにくさを感じる子どもが現われてくるが、ドイツのMini-Münchenでは、その不具合を子ども達自身で解決できる市民活動の場が、「都市」の遊びの要素として用意されていることを指摘している。

こうした都市に「都市」を創る活動は「遊び」や「郷土」を自覚させる2領域を生み出しているが、「子ども型」「大人型」の視点から「名づける郷土」「名づけられた郷土」を分析すると、両者は異なる性質の「都市」を生み出すことを見出している。それは「子ども型」が子どもにとっての都市を発見させる場（「名づける郷土」）であるのに対し、「大人型」は大人にとっての都市を子ども達に獲得させる場（「名づけられた郷土」）を前提としており、ドイツはそれを土台に子どもにとっての都市（「名づける郷土」）を再発見させようとしていることを指摘している。そして、このように「都市」をテーマとする舞台でも、日本のように市民意識の希薄な「都市」ができるのは、日本の住まいがウラの場に人々の関わる余地を残してきたことから、そういったオモテには見えない住まいのあり方が「名づけられた郷土」として「都市」に出現していると結んでいる。

(論文審査の結果の要旨)

本博士学位申請論文はエドゥアルト・シュプランガーの郷土概念をもとに、学校教育と「遊びの都市」に住まいの教育のあり方を探った研究である。

住まいの教育は、従来より、家政学・家庭科教育学の方面で住教育として取り組まれ、そこでは生活者の視点という「内からの眼」が重視されてきたが、その学習範囲は住居内に限定されることが多かった。また、建築学や都市計画学の場合は、住居よりも広い範囲から生活環境のあり方を考える住環境教育が行われてきたが、家政学のもつような生活者の視点は等閑視されるきらいがあった。このような中で本論文は、住居のみに限定されない広い範囲において「内からの眼」を通しての住まいの教育のあり方を提示しており、家政学と建築学における住まいの教育のあり方をより深化させる視点を備えている。そして、人間と住まいの繋がりを「郷土」に見出し、さらにその深層としての「遊び」に着目している。これは従来にない視点であり、本論文の独創性を示している。また「遊びの都市」は、近年日本で盛んに行われているが、その最新情報や各「都市」の実態は断片的に報告されるのみである。しかし、本論文は悉皆的調査に基づくものとして高く評価でき、今後の「遊びの都市」研究の基礎資料となることが期待される。

まず第1章では、「郷土」と「地域」の用語を「学習指導要領」から抽出しているが、対象年代を昭和30年代から平成20年まで、対象段階を幼稚園から高等学校までの全教科として、その用語数の推移を綿密に調査してまとめている。このような膨大な量的調査は地域学習に関する資料としてこれまでに見られない。量的な調査分析では、「郷土」が「地域」へと移り変わったとされる昭和40年代以後も、すべての「郷土」の語が無くなったわけではないことを見出している。その上で、残された「郷土」について、それらが具体的な物や文化の中に内在するものとして既に先人達によって見出された郷土であることを明らかにし、それを「名づけられた郷土」と命名することで、名づけられる以前の次元を見出していることは、新たな「郷土」研究の領域を拓くものとして評価できる。

第2章では、上に見た「名づけられた郷土」と共に、まだ多くの人々によって共有されていない郷土の存在に注目し、それを「名づける郷土」と定義した上で、シュプランガーに着目し、その郷土観を分析して、「名づける郷土」と「名づけられた郷土」の考察を行っている。シュプランガーはドイツ教育界をリードし、また日本の郷土教育にも多大な影響を与えた人物とされているが、その影響の実態は十分に明らかにされているわけではない。本論文が郷土教育におけるシュプランガーの受容の実態を解明していることも注目に値する。シュプランガーは「固有世界の拡大」と共に、「固有世界の維持」を重視するが、彼の言説から後者は「現在の生の充実」と結びついており、それは初発的に意味賦与が行われる遊びの場で成立しているとしていることを読み取り、そこから郷土と遊びの関係を解明している。そして「名づける郷土」が、その人自身で獲得する以外は方法のない「紐帯」と関係することを導き出し、それは

事実や知識といった教育可能な「名づけられた郷土」とは異なる性質をもつものであるとしている。こういった「名づける郷土」は直接教育することが不可能であることを提示しており、それを遊び環境の中で獲得させていくことに新たな教育の可能性を見出している点を高く評価できる。

第3章では、「遊びの都市」と郷土獲得の関連を明らかにするために、まずジャック・アンリオが「遊びの自覚」は現実と遊びの2領域を生み出すとしていることに注目し、これが郷土獲得の要となることを、前田愛や奥野健男の都市周縁部や原っぱにおける「親しみ」を抱く世界との関わりから述べている。そしてこれが都市の均質空間を打破するものとして、都市に生まれ育った者にも郷土獲得の可能性があることを導き出している。ここでは従来通説とされてきた、誕生地から都市への移動によって成立する郷土とは異なる視点が見出されている。また、都市という均質空間に異質な感覚をもたらす遊びに着目して、都市に「遊びの都市」を創ることの意味を究明している本論文の視点は、今後の新しい展開の可能性を示している。そして日本とドイツの「遊びの都市」の実態を調査し、準備する主体（子ども・大人）の差異によって「都市」の現われ方が異なることを指摘した上で、これを「名づける郷土」と「名づけられた郷土」との関わりで分析している。市議会や市民集会所が決定権をもって「都市」を積極的に展開しているようなドイツの枠組みと比較すれば、日本の「都市」は市民意識の未熟さを露呈しているようにみえることを指摘しつつも、新しい視点も提供している。すなわち、そこに居る日本の子ども達は「都市」を主体的に遊び回っており、そういった主体的な関わりをもたらす郷土的な環境自体が住まいの教育に重要であるとして、都市と市民といった西欧的な姿だけには還元できない教育の場としての都市のあり方を考察している。このことは今後の都市と教育に関する萌芽的研究としてさらなる究明が期待される。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成27年2月2日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日：2015年3月24日以降